

(社)日本原子力学会 標準委員会 原子燃料サイクル専門部会  
第1回 浅地中処分安全評価分科会 (F7SC) 議事録

1. 日時 2003年4月22日 (火) 13:30~16:30

2. 場所 エネルギー総合工学研究所会議室

3. 出席者 (敬称略)

長崎 (主査), 木村 (副主査), 山本 (幹事), 大浦, 大間, 河田, 黒田  
三倉, 佐藤, 富樫, 中居, 牧野, 増井 (13名)  
(代理出席委員) 前田 (坂下委員代理) (1名)  
(常時参加者) 阪西, 西堀 (2名)  
(事務局) 太田, 市園

4. 配付資料

F7SC1-1 標準委員会パンフレット

F7SC1-2 標準一覧, 組織図

F7SC1-3 標準委員会の活動基本方針

F7SC1-4 原子燃料サイクル専門部会の活動方針 (抜粋)

F7SC1-5 原子燃料サイクル分野における次期標準案件の改訂及び分科会の設置について

F7SC1-6 標準委員会規程・運営内規・専門部会運営通則

F7SC1-7 標準委員会審議要領

標準委員会 専門部会運営通則 (抜粋)

極めて放射能レベルの低い放射性廃棄物処分安全評価法標準化の進め方について

既存の浅地中処分、トレンチ処分の評価事例

参考資料

F7SC1-参考1浅地中処分安全評価分科会委員名簿

F7SC1-参考2日本原子力学会標準制定スケジュール (案) (原子燃料サイクル専門部会関係)

5. 議事

(1) 出席委員の確認

事務局より, 出席者の確認の結果, 15名の委員中14名の委員と1名の代理出席委員の出席があり, 決議に必要な委員数 (10名以上) を満足している旨の報告があった。

(2) 経緯及び規約類の説明

事務局より, F7SC1-1,2,3,4,5,6,7により本分科会設置までの経緯及び規約類の説明があった。

(3) 役員選出

a. 主査の互選

事務局よりF7SC1-8により主査選任方法の説明の後, 出席委員全員による無記名投票が行われた。その結果, 長崎委員が主査に選出された。(選任基準 8票以上; 15名の分科会委員総数の過半数以上)  
投票結果; 長崎委員 得票 15票

b. 副主査の指名

長崎主査により, 木村委員が副主査に指名された。

c. 幹事の指名

主査, 副主査の協議により, 山本委員が幹事に指名された。

(4) 人事について

事務局より阪西健一氏 (新金属協会), 西堀俊雄氏 (新金属協会), 落合透氏 (新金属協会) 及び平野真孝氏 (新金属協会) が常時参加者への登録を希望されている旨報告があり, 全会一致で承認された。

(5) 標準化の進め方について

a. 標準化の進め方について

増井委員より, F7SC1-9により標準化の進め方について説明があった。以下のような質疑が行われた。

- ウラン廃棄物の扱いは難しい課題であるが, 発生源がいくつもあるわけではなく, 附属書として別途記載するか本体に入れるか入れないかの3つの方法が考えられる。
- 今回の提案内容は全ての線源を含まれている。発電所のデータに比べ, RI施設や研究炉移設についてはわからない部分もあるが, 施設に依存しない範囲と考えられる。
- 廃棄物発生源の区分けは難しく, 発電炉とそれ以外と考えている。発電炉以外の範囲がすぐに事業化対象ではない

と考えられ、発電炉廃棄物の組成に近いところから始めざるを得ないのではないか。組成が一定なものが研究炉にある一方、核燃料使用施設などを含めて考えるのは難しい。

- 現実的には発電炉、研究炉と燃料照射試験設備までの範囲ではないか。
  - 原子力安全委員会において核燃料使用施設のクリアランスレベルの検討を行っており、加速器系の解体廃棄物は周辺状況を考えれば、別途検討すべきではないか。
  - 廃棄物の発生源、核種の種類が重要であり、核種が特定できなければならない。
  - 標準化は一般化された評価法とし、ウラン廃棄物は20万年後の評価となるが、解説に記載すればよいのではないか。
- 廃棄物中の濃度上限値としてはウランを含んだ統一的なシナリオも考えられる。
- 被ばくに関するシナリオ、モデルの決定手段は代表的なストーリーのようなものと考えている。審査そのものではなく、そのベースとなる考え方に固有な $\alpha$ を加えたものでよいのではないか。
  - 評価シナリオの4.1~4.3の小項目については、頻度でシナリオを分けるような章立てになっているが、今後の議論を踏まえて章立ては考えた方がよいのではないか。
  - 対象廃棄物は金属とコンクリートが主であるが、広い範囲を検討したい。
  - 確率的な評価を考慮するか？→決定論的に扱う。

以上の議論を踏まえ、当面は提案された方向で廃棄物発生源、形態にとらわれず、シナリオを検討することとし、ウラン廃棄物については当面検討範囲から除外せず、記載のレベルを替えることも検討することとなった。

#### b. 既存の評価事例について

中居委員より、F7SC1-10により既存の浅地中処分及びトレンチ処分の評価事例について説明があった。以下のような質疑が行われた。

- 土壌汚染防止法との関係はどうなるのか。
- 国の第三次中間報告では有害物はないことを前提としている。
- 管理型の産業廃棄物の場合、トレンチではなくシートを引いている。一般の方からは産業廃棄物以下の処分方法と見られるイメージがある。
- 安定型の産業廃棄物に近く、有害物はないことが前提である。

以上の議論を踏まえ、次回以降、委員の認識をあわせるため標準の具体的イメージ案を提示することとした。また、既往の評価例と考え方を紹介することとなった。

#### (6) 今後の予定

次回分科会を6/24午後開催することとなった。

以上